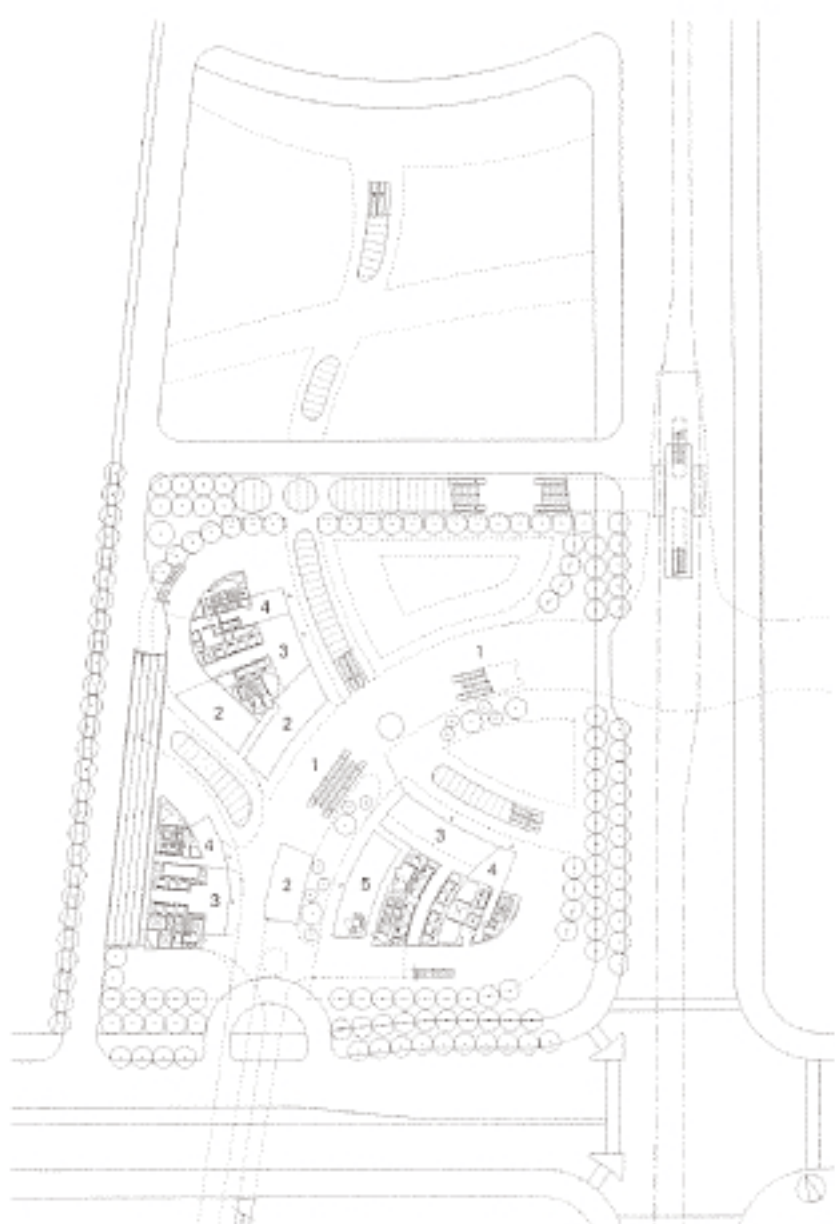




21階～22階平面



1階平面



1階平面



地下2階平面 S=1200

- | | | |
|---------------|----------------|--------------|
| 1 ランプコネクタ | 6 スポーツ・コンプレックス | 11 オフィス |
| 2 ショップ | 7 ホール | 12 アパートメント |
| 3 オフィス・ロビー | 8 ジム | 13 MRTステーション |
| 4 アパートメント・ロビー | 9 プレイ・ルーム | |
| 5 ミュージアム | 10 チャイルド・エリア | |

「国際会議場」(2000年)と同じスーパードミノのシステムです。スーパードミノのシステムは、スライディングの機械室や設備関係が入っている。劇場のヴォリュームを下階に降ろすようにも、スライディング自体に穴を開けることはできない。かと言って、各階スラブにおけるキャンティレバーの先端や、コアの間には、それほど大きなスペースがない。

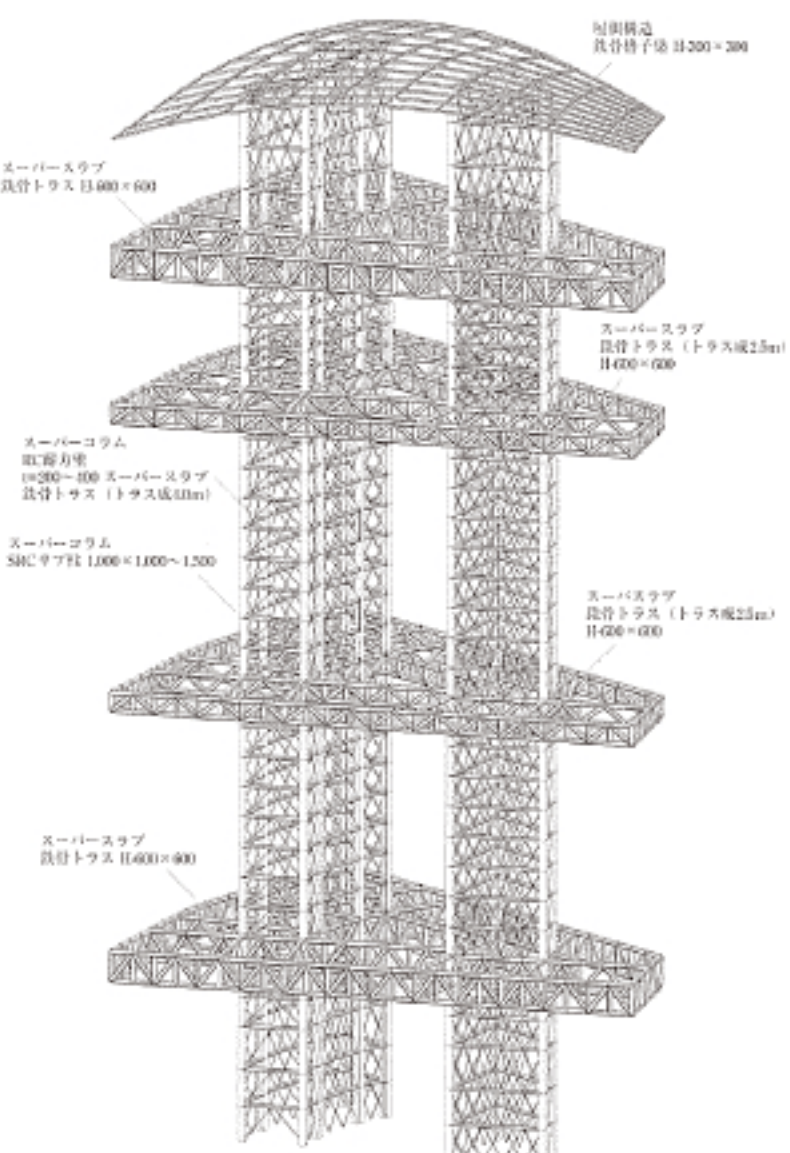
超高層建築の問題点として、常に挙げられる設備。特に空調システムには、どのような対応をされているのか? 黒川: どんなに建築が接近していても、上層階は、少しはファサードに太陽光が当たるでしょう。そうすると、ダブルスキンの外側が熱せられるので下層部と温度差が生じて、ダブルスキンの間に



コンベヤのヴォリューム・スタディ

波」を執筆したアルビン・トフラーは「情報化時代は都市の消滅」とも言及していた。でも、彼らの予言は間違っていると思うのです。情報化社会こそ、たくさん情報が求められている。人に会うことが求められている。事実、携帯電話が発達的に普及した結果、「出会い系サイト」なるものが流行して、人が開会に

| | | |
|--|---|---|
| <p>名称: テラノポリス (情報・通信技術総合施設)</p> <p>所在地: Singapore, one-north Central X change</p> <p>建築主: JTC Corporation</p> <p>用途: 文化施設、研究所、事務所、集合住宅、物販、飲食施設、娯楽施設</p> <p>設計・監理: 黒川伸建築都市設計事務所 担当: 黒川伸、上田清、今川聖二、及川道、渡邊亮、橋本正樹、森田健太郎</p> <p>構造: Jarong Consultants+Sasaki & Partners 担当: 佐々木時明</p> <p>設備: Jarong Consultants</p> <p>規模</p> | <p>敷地面積: 12,057m²</p> <p>建築面積: 7,135m²</p> <p>延床面積: 125,000m²</p> <p>容積率: 計画 1,000%</p> <p>階数: Block A / 地下6階、地上30階 Block B / 地下6階、地上22階 Block C / 地下6階、地上30階</p> <p>階高: 基準階 / 4.2m 天井高: 基準階 / 2.8m 最高高さ: Block A / 135.7m, Block B / 111.0m, Block C / 124.3m</p> <p>階間</p> <p>設計期間: 2002.06-2003.02</p> <p>竣工予定: 2004.12</p> | <p>構造</p> <p>主体構造: 鉄骨造・鉄筋コンクリート造</p> <p>外装仕上げ</p> <p>屋根: アスファルト防水コンクリート製5層の上 屋上緑化、一部太陽熱利用装置設置</p> <p>外壁: 強化ガラス・ダブルスキン</p> |
|--|---|---|



スーパードミノ。構造システム図

「道」中間領域」と、昔から言っていたコンセプトが、この部分で、実現するわけです。そこは、様々な意味で、コミュニケーション空間という意識を高めるために、徹底的に道路の表面をアードバタイズメントに使う予定です。天井も路面も、全て広帯域に使用される。ネオンサインすらも、床に埋め込む。だから、凄く面白いシニールなポップアートのような空間が、出現すると思われています。そのランプ上に、キョスタやカフ

集っている。だから、この建築がICITのハブなのであれば、そこは人が出会う場所になければならないと考えています。実際には、建物と建物の間に、ランプ・コネクタと呼んでいる、曲がりくねった蛇のようなスロープが、建物間を貫いています。その空間は、車が通らないので、立体的な歩道にもなっているわけです。しかも、四階部分にガラス屋根を掛けて、エアコンを効かせているので、雨が降っている時でも、まったく傘をささずに歩道は歩くことができます。その歩道は、インテリアともエクステリアとも採れない、中間領域として設定されています。

「道」中間領域」と、昔から言っていたコンセプトが、この部分で、実現するわけです。そこは、様々な意味で、コミュニケーション空間という意識を高めるために、徹底的に道路の表面をアードバタイズメントに使う予定です。天井も路面も、全て広帯域に使用される。ネオンサインすらも、床に埋め込む。だから、凄く面白いシニールなポップアートのような空間が、出現すると思われています。そのランプ上に、キョスタやカフ